

主 題：罪を赦された者の幸い

聖書箇所：詩篇 32篇

テーマ：神様の前に罪を告白して、赦された者の喜びはどのようなものか

今朝、皆さんとともに大切なみことばである詩篇32篇から、神様が私たちに教えてくださっている真理を考えていきたいと思います。

いつものように、まずみことばをお読みしたいと思います。

### 詩篇32篇 ダビデのマスクール

「:1 幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。:2 幸いなことよ。【主】が、咎をお認めにならない人、その霊に欺きのない人は。:3 私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。:4 それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。:5 私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。

「私のそむきの罪を【主】に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。:6 それゆえ、聖徒は、みな、あなたに祈ります。あなたにお会いできる間に。まことに、大水の濁流も、彼の所に届きません。:7 あなたは私の隠れ場。あなたは苦しみから私を守り、救いの歓声で、私を取り囲まれます。:8 わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。:9 あなたがたは、悟りのない馬や驟馬のようであってはならない。それらは、くつわや手綱の馬具で押さえなければ、あなたに近づかない。:10 悪者には心の痛みが多い。しかし、【主】に信頼する者には、恵みが、その人を取り囲む。:11 正しい者たち。【主】にあって、喜び、楽しめ。すべて心の直ぐな人たちよ。喜びの声をあげよ。」

さて、この詩篇の内容を考えていく前に、まず自分自身のこととして、次のことを少し考えてみてください。もし私たちが何かしらの罪を犯した時に、そのことに関して周りのだれも知らない、自分だけが知っているような時に、罪を黙ったままでいることは私たちにとって価値あることなのでしょうか？それとも神様の前に素直に告白し、罪を悔い改めることが私たちにとって価値ある、ふさわしい態度なのでしょうか？このような質問をすれば、恐らく多くの皆さんは、みことばが教えているように、罪を犯せばすぐにその罪を神様の前に告白して、悔い改めることが私たちにとって大切なことだと答えられると思います。ではもう一つ質問すると、今あなたの心の中に、神様の前に心から悔い改めることを拒んでいたり、だれにもばれていないから大丈夫と、自分の尺度で計って、別に大した問題ではないから告白する必要はないと隠しているような罪はないでしょうか？きょう、私たちがこの詩篇を通して考えていきたいことは、タイトルにもあるように、罪を赦された者の幸いです。神様の前に罪を素直に告白して、その罪の赦しを得ることがいかにすばらしいことなのかをこの詩篇を通して改めて考えてみたいのです。

### ●歴史的背景：ダビデの犯した罪（cf. IIサムエル記11-12）

詩篇32篇の著者であるダビデは、だれよりもそのすばらしさを知っていた人物でした。覚えていますか？彼自身もかつては自分の犯した罪がばれることを恐れて隠したりしました。それによって、自分の身に大きな結果を招くこともありました。しかし、その罪を悔い改めたからこそ、彼は大きな喜びを手にすることができたのです。具体的にどんな話だったのか、これまでも何度も見ている話ですけれども、この詩篇32篇を考えていく上で非常に大切なことなので、いま一度ダビデの犯した罪を思い出してみましょう。

そのことは主に聖書の中のⅡサムエル11-12章に書かれていますけれども、本来であれば王様であるダビデは、イスラエルの軍勢とともに戦いに出ているべきでしたけれども、みなが戦いに行っている間、ダビデはエルサレムにとどまっていた。そんなダビデはある夕暮れ、屋上からバテシェバという女性がからだを洗っている姿を目にするのです。その姿を目撃したその瞬間に、ダビデは自分自身の心を固く守るべきでした。みことばに心を留めて、誘惑に対して勝利するべきでした。しかしそうはしませんでした。バテシェバはほかの人の妻だったにもかかわらず、ダビデの心は自分の欲にとらわれて、自分のもとに呼び寄せて寝たのです。そしてその結果、彼女はみごもることになります。ダビデはこのことを部下から知らされました。この時、彼は自分の犯した過ちを神様の前に心から悔い改めるべきでした。しかし、ここでもそうしようとはせずに、その罪をどうにかしてごまかしてなかったことにしようとしたのです。彼は自分の犯した罪が明るみに出ることを恐れて、自分の評判を守るためにいろいろな策略を立てます。まず彼は、戦いに出ている彼女の夫ウリヤを戦場から呼び戻して家に帰り、自分の奥さんであるバテシェバと寝させようとしていました。ふたりが一緒に寝れば、その後で子どもが生まれたとしても自分のしたことはばれないと考えたのです。しかし、この計画はうまくはいきませんでした。なぜかというと、呼び戻したウリヤが、戦場で戦っている数多くのほかの仲間がいるのに、自分だけが家に帰って妻とは寝られないとダビデに誓ったからでした。ダビデの策略はことごとく失敗します。そして、後のなくなった彼はウリヤが打たれて死ぬようにという命令を出して、激戦の真っ正面に送り返したのです。その結果、当然、ウリヤはその次の戦いで戦死することになりました。

王に忠実であろうとしたその人物は、王であるダビデの手によって殺されたのです。このようにしてダビデは、情欲をもって女性を見、姦淫の罪を犯しただけではなくて、自分に忠実に仕えようとしたその夫を殺害するといった、大変大きな罪を犯しました。ウリヤが亡くなったことを耳にした時、彼は心の中でだれにもばれなかった、だれにも気づかれることなく問題を解決できた、もう安心だと思っていたでしょう？この時のダビデの心は、自分の犯した過ちがばれないことにただとらわれていました。彼は周りの人々が自分をどう評価するのか、そのことだけに固執していたのです。彼は本当に心を留めるべき存在に目を留めるのではなく、人々の目を恐れていました。ダビデはその後、預言者ナタンが自分のもとにやって来て罪を責めるまでの間、その罪を隠し続けました。自分のしたことを神様の前に認めようともせず、悔い改めることを拒み続けていたのです。

しかし、遂に神様から遣わされたナタンがやって来て、彼の罪を厳しく戒めた時、彼はそれに対して「私は主に対して罪を犯した」と、心から悔い改めました。自分のしたことが間違っていると正直に認めたのです。神様はそんな彼に対して大きな憐れみを示してくださり、赦しを与えられました。しかしながら、彼の犯したその罪は大きな結果を彼の人生に招くことになったのです。これが簡潔ですが、一連の流れでした。

そしてダビデはそんな自分の犯した罪であったり、黙っていた時のことであったり、罪が赦されたことの喜びを振り返って、この詩篇32篇を記したのです。ちなみにこの32篇の最初には“ダビデのマスキール”という表題がついています。多くの聖書注解者たちは、このことばが「賢くする」とか、「知恵や理解力を与える」といった動詞、“サーカル”というヘブル語と関連していることから、“マスキール”というのは知恵や訓戒を意味していると考えています。あのスポルジョンは、「「マスキール」とは、これが教育的または教訓的な詩篇であることを示しています。ひとりの信仰者の経験は他の人々にも豊かな教訓を与え、主の群れの足取りを明らかにし、そのようにして、弱い者たちを慰め導くのです。」と説明していました。ですから、覚えておいてほしいことは、ダビデはこの詩篇32篇を通して、自分の経験を振り返った時に、彼自身が学んだ大切な教訓を人々にも分かち合おうとしていたということです。彼は自分自身が過去に味わったことが、だれにとっても重要な真理であったからこそ、そのことをほかの人にも教えようとするのです。

では一体ダビデはどんなことを経験し、学んだのでしょうか？彼はどんな教訓を人々に与えようとしているのでしょうか？そのことをこれからともに見ていきましょう。そしてダビデが経験から証言してくれるその教えをそれぞれのこととして考えてみましょう。

### ○罪を赦されたダビデの証言：

彼もかつて罪を犯してそれを隠すことができました。それがいかに愚かで、大きな問題をもたらすことなのか、その逆に罪を素直に告白することがいかに素晴らしいことなのか、そのことをダビデは学び、そのことを私たちに教えてくれているのです。ですから、もし皆さんの心の中に、神様の前に心から悔い改めることを拒んでいるものがあったり、だれにもばれていないから大丈夫だ、別に大した問題ではないから告白する必要はないと隠している罪があるのであれば、ダビデのことばによく耳を傾けてください。また同時に、罪を赦された者が抱くことができるその幸いが、その喜びがいかに素晴らしいものなのか、それがどんなに喜びにあふれたものなのかをともに考えてみましょう。

このことばが皆さんの励まし、助けになることを心から祈っています。

### ●教訓：罪の赦しのうちに最高の喜びを見出すことができる 1-2節

ダビデはまずこの1-2節で、自分自身が経験して学んだ重要な教え、教訓を教えてくれています。その教訓とは、彼が一番言いたかったことですけれども、私たちは罪の赦しのうちに最高の喜びを見出すことができるということです。言い換えれば、神様によって罪赦された者というのは、本当の幸いを、満足はその心のうちに抱くことができるということです。そのことが1-2節にまとめられました。こう書いてあります。「:1 幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。:2 幸いなことよ。【主】が、咎をお認めにならない人、その霊に欺きのない人は。」と。

ここで特に目を留めてほしい三つのポイントがあります。

#### 1. 「幸いなことよ」

まず一つ目ですけれども、読まれた時に皆さん気づきました？この詩篇を始めるに当たってダビデは「幸いなことよ」ということばを二度繰り返し用いていました。1節、2節の一番頭のところにです。これは日本語の聖書ではわかり辛いですけれども、この「幸いなことよ」というのは、ヘブル語の方では複数形で書かれているのです。著者はこうしてあえて複数形を用いることによって、幸いというものが豊かにあふれている様子を強調しているということです。複数、たくさん、豊かにあふれていることを強調しているのです。ですから、このことばは単にうれしさとか、幸せといったもの以上に、あー、なんて幸せな人なのだろう、あー、なんて喜びにあふれている人なのだろう、なんて豊かに祝された人なのだろうということばで置きかえることができるのです。思い返してみれば、一番最初の詩篇1:1-2も同じことばで始まっていました。「:1 幸いなことよ。悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。:2 まことに、その人は【主】のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。」と。詩篇1篇のところでは、人が神様に逆らうこの世の教えに従うのではなくて、神様のことばに従うのであれば、その人は神様にあつて最高の喜びを見出すことができると教えていました。その「幸いなことよ」と同じことばをここに用いることで、ダビデは神様にあつて罪を赦されるということがいかに幸せなことなのか、それがいかに最高の喜びであるのかを描こうとしていたのです。そのそむきを赦されて罪を覆われた人、主が咎をお認めにならない人、そんな人はなんて最高の喜びを持っているのだろうと。それがこの二つの「幸いなことよ」ということばが表していることでした。

#### 2. 罪に関する三つのことば

次に、この箇所ですら二つ目に目を留めてほしいポイントは、ダビデがここでは「そむき」、「罪」、そして「咎」という三つの異なることばで人の罪を表現していたということです。ダビデはそうやって人

の罪というものをいろいろな角度から描いていたのです。では具体的にそれにはどんな意味があるのでしょうか？

### 1) そむき

まず一つ目に登場していた「そむき」ということばには、「主に反抗すること」や「公に逆らうこと」といった意味があります。主に対して逆らうことです。そむくということは、神様や神様の権威に対して逆らうことを表しているのです。逆らうと言った時に、これは偶然過って犯してしまうものではありません。自分のしていることが間違っているとわかっていながらも、自分の意思で神様を拒んで故意的に神様に逆らおうとする、それが「そむき」ということです。

### 2) 罪

二つ目に登場していた「罪」ということばには、皆さんもよくご存じかと思いますが、「的を外す」という意味があります。想像してみてください。弓矢を持った狩人が標的となる獲物に向かって矢を放とうとするのです。でも、もしその人が弓を十分に力いっぱい引かなかったり、矢の向きを正しく決めていなかったら、当然矢が獲物に届かなかったり、矢が獲物に正しく命中しないのです。そうやって的を外してしまうこと、聖書はそれを罪だと言うのです。これは私たちが罪を犯してしまう時と同じです。私たちが罪を犯す時に、私たちは神様が求めておられるみことばの的を正しく完璧に射ることができていないということです。100%でなければ、99%でも、その基準から足りていない。それを的を外す罪だと言うのです。それが意図的に行うものであろうが、意図的でなかろうが、どんな行為であろうが、考えであろうが、思いであろうが関係ありません。神様の定められたみことばの基準に対して、私たちが足りていないのであれば、私たちがその基準に十分に届いていないのであれば、それはみな全部「罪」だということです。

### 3) 咎

そして三つ目に登場していた「咎」ということばは、もともと「腐敗した」とか、「ねじ曲がった」という意味を持っています。神様が求めておられる本来のあるべき姿から、人々が罪によって汚れてねじ曲がってしまっている状態のことを、このことばは表しています。また、このことばは、そのようなねじ曲がっているという意味に加えて、神様の望まれている姿からねじ曲がっている、腐敗しているからこそ、時にこれを「罰」や「有罪」というような意味で表すこともあります。神様が求めている、そこからねじ曲がっているから、それに対して罰が与えられるというのです。創世記4：13でカインはそのことばを用いていました。「カインは【主】に申し上げた。「私の咎（私の罪の罰）は、大きすぎて、にないきれません。」と。ですから「咎」というのは、人の内側が罪によって汚れてねじ曲がっている状態、そしてそれゆえに神様からの罰に値するということを表しているのです。

こうしてダビデは三つの異なることばで罪を表現していました。罪というものは反抗的なものです、罪というものは的外れなものです、罪というものは歪んだものです。ダビデはこうして三つのことばを用いて表現することで、罪というものがあらゆる面から見ても汚れているのだということを強調していました。そしてダビデはどの視点から見ても、自分自身が聖い神様の前に立つにふさわしくない、ただ罰を受けるに値する、そんな罪深い存在であることをわかっていました。

## 3. 罪の赦しに関する三つのことば

しかし、同時にそんな罪を悔い改めた者に対しては、神様の赦しというものがあることも、ダビデはここで教えるのです。そしてそのことを教えるために、ダビデは今罪に対して三つのことばを用いていましたけれども、神様の赦しに関しても同じように三つのことばを用いてここで表現するのです。それが三つ目に目を留めてほしいポイントです。もう一度1-2節をよく見ていただくと、三つ出てきます。

### 1) 赦され

まず一つ目に、「そのそむきを赦され」とあります。この「赦され」というのは簡潔に言うのであれば、「何かを持ち上げる」とか、「何かを取り除く」といった意味を持っています。そこからどけるのです。このことばは罪が完全に取り除かれて、自分の上に重くのしかかっていた罪の重荷が取り去られることを強調しているのです。私たちが心から罪を悔い改めるのであれば、神様の赦しというものは、まるでその犯した過ちがなかったことかのように私たちからその罪を遠く引き離してくださるということです。わかりやすい例としては、詩篇103：12に「東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。」と書いていました。神様は私たちが心から悔い改めるのであれば、罪を完全に取り除いてくださるのだと。

## 2) おおわれた

またその次に「罪をおおわれた人は」と続いていました。この「おおわれた」ということばは、文字どおり「何かをおおい隠すこと」であったり、「何かをおおって見えなくすること」を意味しています。何かにかぶせ物をするのです。つまり私たちが聖い神様の前に罪を犯して、いかに汚れた存在であったとしても、その罪を悔い改めるのであれば、神様ご自身がそれを見えないように、その汚れが見えないようにおおい隠してくださるということです。もちろん私たち自身は完璧でもなければ、神様の基準からかけ離れた存在です。しかし、そんな私たちに対して、神様がキリストの犠牲を通して与えてくださる赦しというのは、そのすべてをおおってくださるのだと。

## 3) お認めにならない

そして最後、三つ目に出てきたことばは「咎をお認めにならない」ということでした。この「お認めにならない」ということばは、「何かを記録したり、数えたりする」といった意味が含まれています。つまり神様が過ちや罪をもう記録として残されないということです。その罪はいつまでも記録簿に残されたままではなくて、消し去られてしまうと言うのです。考えてみてください。私たちは、時にだれかの過去の過ちを持ち出してきて、その人を責めることがあります。自分の伴侶や家族、また兄弟姉妹に対して、あなたはあの時から全く変わっていませんね、前にしたことを何度も同じように繰り返すのですね、なぜあなたは同じことばかり何度も繰り返すのですか？私たちはそうやって自分のうちに記録していたもので非難を口にすることがあるかもしれません。しかし、神様は決してそうはなさらないと言うのです。神様が赦してくださるその時、その赦しというものは、いつまでも罪を覚えていて、事あるごとに持ち出して責めることはなさらないと言うのです。イザヤ43：25に「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」と記されていました。覚えておきたいことは、この罪の赦しというものは、私たちにあるのではなくて、神様ご自身にあるということです。神様ご自身の性質によって、私たちの罪は完全に赦されるのです。

これが、ダビデが見出していた神様の赦しでした。彼は自分の犯した罪ゆえに、確かに深刻な問題を抱えることになりました。彼が人々の目を恐れて隠そうとしていたその罪は、明るみになりました。彼とバテシェバの間に生まれたその子供は亡くなりました。それだけではなくて、ダビデの家系を覚えた時に、ダビデの家族にはこの後数え切れないほどの問題が生じることになります。しかし、それでもなお、そのダビデが、罪を黙っているよりも、神様の前に悔い改めることの方がすばらしいと言うのです。ダビデはさまざまな苦しみを経験しました。彼が経験したくない、味わいたくないと思って隠していた、そのものを味わうことになりました。いや、それ以上のものを味わうことになりました。でもそんな彼が、罪を否定することよりも、うそや欺きでおおい隠そうとすることよりも、正直に告白して、主の赦しを手にするの方が、何にもかえ難い最高の喜びだ、神様の赦しを得ていることの方が何よりもすばらしい、それがダビデが学んだ教訓でした。

●根拠：個人的な経験を通して 3-7節

さて、ダビデはそのことを私たちにも教えてくれていたのです。私はかつて隠していたけれども、告白することに罪の赦しがあること、神様の赦しがあることがいかにすばらしいことなのかを学びましたと、1-2節で話した後で、彼は3-7節のところでは、自分自身の経験を交えて語っていくのです。ダビデは罪赦された者が味わうことのできる幸いがいかにすばらしいものなのかということのをだれよりもよくわかっていました。それは、彼自身がまさにそんな個人的な体験を通して、そのことを学んだからでした。幾つかはもう見ましたけれども、3節のところからより詳しく記されています。3-4節に、「:3 私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。:4 それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髄は、夏のひでりでかわききったからです。」と、彼の個人的な経験が続いています。ダビデはかつての自分の姿を思い返していました。彼はある時には自分が黙っていたのだと言うのです。言いかえれば、彼はその時、自分の罪を認めることを拒んで、そのことにひと言も触れようとはしなかったということです。本来であれば、自分は間違っていましたと罪を告白する必要があると知っていたにもかかわらず、彼はそのことを嫌がりました。まるで自分がなしたことが何ら大したことのないものであるかのように、あたかも何もなかったかのように歩んでいたのです。ある意味驚きかもしれません。あのダビデがこのようにかたくなに振る舞っていました。神様のみこころにかなった歩みをする人だと聖書の中で称賛されていた彼も、自分自身のうちに抱える大きな問題を目にしていながら、それに向き合おうとしなかったことがあったのです。彼も私たちと変わらない罪人でした。

少し立ち止まって考えてみてください。一体どうしてダビデは罪を犯したその時に、すぐに悔い改めなかったのでしょうか？なぜバテシェバが身ごもったという知らせを聞いた時に、その罪を告白しなかったのでしょうか？少なくとも言えることは、自分の犯した罪がもたらす結果を、彼自身が恐れたからでした。彼は人々の目を恐れていたのです。でも、その気持ちを覚える時に、私たちもそのことがよくわかりませんか？私たちも何か罪を犯してしまった時に、周りの人に知られたくないと、罪が引き起こす結果を恐れて、どうにかしてその罪を隠そうとすることがあります。もし知られたら、自分の評判や評価が落ちてしまう、自分の仕事を辞めなくてはいけなくなるかもしれないし、友人との関係がそれによって絶たれてしまうかもしれない。いろいろな結果を恐れて、私たちは罪を隠そうとします。そして時に罪を隠そうとするために、また罪を重ねることもあります。でも、その結果、ますますその罪の影響が大きくなって、そのことが明るみに出るのがますます恐ろしくなって、私たちは罪を告白しようとはしなくなるのです。

ダビデは自分の過ちをわかっていながらも、そのことを隠し通そうとしました。でも、その結果が3節に「私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。」と書かれていました。彼のからだは一日中うめいて、疲れ果ててしまった。彼のうちから喜びや気力が失われてしまっただけではなく、まるで夏のひでりでからからにかわききっているかのように彼のうちには何の力も残されていませんでした。4節にも「それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髄は、夏のひでりでかわききったからです。」と書いています。そのようにして神様に逆らう間違った態度というのは、彼のうちに大きな苦難と苦悩をもたらしていました。彼は文字どおり弱り果てて、惨めな状態に置かれていました。悔い改めない、この罪というのはダビデのうちに大きな苦しみをもたらしていたのです。でも、ここで注目してほしいのは、一体だれがこの苦しみを彼の上にもたらしていたのかということです。3節後半から4節に、「私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり」とあります。ダビデに苦しみをもちたっていたのは、ほかのだれでもない神様でした。神様ご自身がご自身の大きな愛のゆえに、かたくなに罪を告白することを拒み続け、罪の中を歩み続けるダビデに対して懲らしめを与えておられたのです。

でも一体なぜ神様はそんな厳しい懲らしめを、ご自身の愛する子どもたちの上になされてきたのでしょうか？それは、神様がご自分のもの、ひとりひとりのことを心から愛しているからこそ、その心が罪

によってかたくなにならないようにと働かれるためでした。神様はご自分の子どもたちのことを愛しているからこそ、罪をそのまま放置してはおかれないのです。罪に対して必ず懲らしめを与え、それによって彼らに痛みや惨めさを覚えさせるといなのです。そうすることによって、懲らしめを受けた私たちが気づかされるようになるのです。自分がかたくなに罪を告白することを拒んでいた、自分に喜びや満足をもたらしてくれると信じて疑わなかったこの罪を、手放したくないと願っていたけれども、これは実際にはひどいものだ、間違っていると。かたくなに認めようとしなかったその罪は、自分にとっては害でしかないのだと。ご自分の子どもたちを愛しているからこそ、神様に従うことこそが本当の喜びであると、神様は懲らしめを通して私たちに教えようとされるのです。ヘブル12：5-6にもそのことは記されています。「:5 ……わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」と。そのことをダビデは、自分の個人的な体験として学びました。罪の結果を恐れて、罪を悔い改めないまま主の懲らしめを受けることよりも、主の赦しを手にする、たとえそこに大きな結果が伴うことであろうとも、主の赦しを手にするこそが本当の喜びであると、そう心から受け入れたのです。そしてそんな彼が罪を悔い改めて神様の赦しを手にするには実にすばらしいと言うのです。自分の過ちを黙ったままで、神様に逆らい続けた時は、本当に苦しくて惨めで何の価値もなかった。そんな苦しみを味わうのではなく、罪を犯したら黙ったままでいるのではなく、神様の前に告白しなさい。ダビデはそのことを厳しい訓練を通して学びました。自分の訓練、自分の経験を通して、罪を悔い改めないまま黙っていることがいかに惨めで苦痛を伴うものであるかということを知ったのです。だからこそ、ダビデは私たちにもそのことを教えてくれているのです。

でも彼が学んだことは、何も悪い面だけではありませんでした。彼は同時に、悔い改めに対する神様の赦しにある慰めというもののすばらしさも味わったのです。5節のところに「私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を【主】に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。」と書いていました。ダビデはまたここでも同じように、罪に対して罪、咎、そむきという三つの異なることばを用いていました。ダビデはここで自分の犯した罪を正直に告白し、もう隠そうとはしませんでした。彼は自分の罪と向き合わずに逃げることをやめ、自分の犯したことが神様の前に間違っていたと、へりくだって認めていたのです。これまでは罪の結果やその罰を受け入れられずにいた彼が悔い改めたからこそ、自分のしたことの結果を素直に受け入れていました。ダビデは自分の罪を罪として認めていたということです。言い訳をすることもなければ、ほかの人や状況に責任を転嫁することはありませんでした。いや、自分は王様です、いろいろな責任や重荷があって、疲れていて仕方なくやってしまいました、あなたには私の痛みや私の大変さなんてわかりませんよね、あなたには理解できませんよと、自分の罪を正当化することもしませんでした。彼は自分の罪が戒められた時に、私は主に対して罪を犯したと素直に認めたのです。

そしてこれは私たちにとっても、とても大切なことになるのです。なぜなら、時に私たちは自分の犯した罪に対して、それが神様に対してのものであろうが、周りの人に対してのものであろうが、その罪を自分のこととして心から認めようとしないうことがあつたりします。私たち、だれかから罪を指摘されることがあつたとしても、まず自分の正当性を口にしてしまうかもしれません。いや、自分のしたことはまあ、確かに間違っていたのですが、でも、あの状況の中では仕方なかったのです、自分のしたことで傷つけてしまつてごめんなさい、でも、実際はあの人が先に始めたのです、だから自分だけではなく、あの人も謝るべきではないですかと。ダビデは自分自身の罪を隠そうとするのではなく、自分のしたことは間違っていました、神様の基準に満たないものがありましたと、主の前にそれを正直に認めていました。そんな自分は本来であれば、神様からの罰を受けるにしか値しない存在です。彼はそうや

って心砕かれていました。彼はかつてのように逃げ惑うのではなくて、自分の罪を自分のこととして受け入れ、神様の前にへりくだっていたのです。

本当の悔い改めというものを私たちが考える時に言えることは、ただ単に自分は間違っていたと認めることだけではなく、自分の罪がもたらす結果がどんなものであれ、自分はそれに値すると受け入れることです。そしてそのようにして真に悔い改めた者に対して、何が待っているのか、5節の最後に書いていました。「私のそむきの罪を【主】に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました」と。神様の前にそうやって自分のした罪を認めて心砕かれ、悔い改めるのであれば、罪を告白して神様に救いを求めるのであれば、その者には罪の赦しを与えると約束してくださっているのです。だとすれば、自分自身の歩みを振り返ってみて、自分のしたことが間違っているとわかっているにもかかわらず、それを隠そうとしているものはないでしょうか？自分なりにいろいろな言い訳を並べ立て、考え得るあらゆる理由を自分自身に言い聞かせることによって、それを正当化しようとしているものがあるかもしれません。心の中でどれだけそう言い聞かせようとしても、それが間違っているとわかっているからこそ、次第にそのことに気づくたびに心が重たくなっていくのです。自分の心が間違いに気づいているからこそ、私たちのうちから喜びや満足が失われていくのです。ダビデは自分の犯したその罪の結果から逃れるために、罪を告白したのではありませんでした。彼は自分が神様の前に間違っていたということを正直に認めたのです。

そして、そうやって神様の懲らしめと罪の赦しを個人的に味わったダビデは、それらのことをまとめて、6節で「それゆえ、聖徒は、みな、あなたに祈ります。あなたにお会いできる間に。まことに、大水の濁流も、彼の所に届きません。」と言うのです。自分自身が罪を黙っていた時に味わった惨めさと、罪を告白して赦されたことの安堵さを味わったダビデがしたことは、自分が経験したそのことを、ほかの聖徒にも伝えることでした。彼はほかの人々が自分と同じような悲しみや苦しみを味わうことがないように、罪を犯せばその罪をすぐに認めて、まだ神様を見出せるその間に、罪の赦しを祈り求めるようにと教えていたのです。

ここに面白いことばが出てきますけれども、読んでいて混乱するかもしれません。「まことに、大水の濁流も、彼の所に届きません」と、この「大水の濁流」ということばですが、多くの註解者は文脈から考えて、これが神様からの懲らしめを表しているのではないかと考えています。つまり、「大水の濁流」というのは、私たちが罪を犯しても悔い改めずに、その罪を隠し通そうとするのであれば、それに伴う罪の結果や懲らしめがまるで「大水の濁流」——大洪水のように押し寄せてくるということを意味していると言うのです。皆さんもご自身の目やニュースなどでご覧になったこともあると思いますけれども、洪水が押し寄せてくる様子を見ると、その洪水が大きければ大きいほど普段では考えられないようなものが流されていくのです。大きな車や時には家さえもいとも簡単に押し流されて、大きな被害を生じさせてしまうことがあります。それと、同じように大水の濁流が押し寄せてくれば、私たちの歩みにおいて多大な被害や影響をもたらすようになるのです。だからこそ、ダビデはここで、大洪水が来る前に、大水の濁流が来る前に、罪を悔い改めなさいと言うのです。ずっと待っていないでまだ時間のある時に自分の罪を認め、それを神様に告白しなさい。そうすれば大水の濁流も彼のところには届きませんと。自分の罪によって、ひどい戒めや懲らしめが来るようなことになる前に、時がある間に祈りなさいと。悔い改めなさいと。惨めさの中で苦しまなくても、心から悔い改めるのであれば、私たちは、この方のうちに、赦しやさまざまな困難からの守りを見出すことができるのです。

7節でもダビデは「あなたは私の隠れ場。あなたは苦しみから私を守り、救いの歓声で、私を取り囲まれます。」と言っていました。ダビデが黙っていた時は、神様によって懲らしめを受けていたのです。昼も夜も重くその御手がのしかかり、夏のひでりでかわききったかのように彼は苦しめられていました。でも、罪を悔い改めた時に、彼はこの同じ神様のうちに安らぎを見出すことができました、守りを見出す



ことができました。私たちは罪を黙ったまま、いつまでも心のうちに葛藤を覚えて、主の懲らしめを受けて苦しむことよりも、罪を素直にすぐに告白すること、罪の赦しを与えられて、ほかのだれでもない神様のうちに身を委ねることができること、その幸いを手にすることが重要になるのです。ダビデは経験を通してそのことを学びました。そしてその彼が、ここにこそ最高の喜びがあると私たちに教えてくれているのです。こうしてダビデは罪を赦された者にあるその幸いがいかにすばらしいことなのかを個人的な体験を通して学んだからこそ、私たちにも教えてくれていました。

### ●適応：罪の赦しのうちに喜びがあることを知った者の応答 8-11節

最後に、ダビデはこれまでの内容をすべてまとめて、8-11節で、最高の喜びがあることを知った者がとるべきふさわしい態度、適応、応答というものを記してくれていました。まず8節に「わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。」と書いています。ダビデは、罪の赦しのうちに最高の喜びがあることをあなたが知ったのであれば、実際にそれにどう応答するべきなのかを教えましょう、私自身が学んだことが、それぞれの信仰生活の中でどのように具体的に実践できるのか、助言を与えましょうと言うのです。では具体的にどんな適応、助言を与えていたのか、大きく分けて三つありました。

#### a) 正しいことをなすのにかたくなであってはいけない 9節

一つ目の適応が9節に記されています。9節に「あなたがたは、悟りのない馬や騾馬のようであってはならない。それらは、くつわや手綱の馬具で押さえなければ、あなたに近づかない。」と書いています。一つ目は正しいことをなすのにかたくなになってはいけないということです。ダビデが人々に言ったことは、悟りのない愚かな馬や騾馬のようであってははいけませんと求めていました。これらの動物というのは、くつわや手綱などをつけて人が操縦しなければ、進むべき道に進んでくれないということです。彼らは制御されることがなければ、正しい道を進むことができないのです。それと同じように、もし私たちが罪を犯している時に、その罪に気づいて、その罪に対する神様の懲らしめを覚えているのであれば、かたくなにそれを拒んではいけない。反抗的になって強制されなければ本来歩むべき道を歩まない、そんな愚かな態度であってはいけないということです。強制される前にみずから進んで罪の赦しにある喜びに心を留めて、神様に従って、神様の前に喜ばれることを選択しなさい、罪を告白することをみずから率先しなさい、愚かな馬や騾馬のように、強制されなければ何もできないような者であってははいけませんと教えます。

#### b) 罪を悔い改めることを実践すること 10節

二つ目の適用が10節に記されていました。二つ目は罪を悔い改めることを実践することです。10節に「悪者には心の痛みが多い。しかし、【主】に信頼する者には、恵みが、その人を取り囲む。」と書いてありました。ここで出てきている「痛み」ということばには、「深い悲しみ」や「苦悩」、「激しい苦痛」といった意味が含まれています。ダビデが言いたかったことは、神様に逆らって歩んでいる悪者たち、悔い改めない者の歩みには、悲しみや痛みや不満や困難が数多く存在しているということです。でもその反対に「しかし、【主】に信頼する者には、恵みが、その人を取り囲む」とも言いました。皆さんもご存じかと思いますが、この「恵み」ということばは、主との契約やその契約に対する主の誠実さを表わすのに用いられることばでした。言い換えれば、決して途絶えることのない、変わらない神様の愛を表していたのです。そんな恵みが主に信頼する者を取り囲むのだと。考えてみてください。ダビデの場合を思い返してみても、彼に対する神様の愛は決して変わることはありません。確かにダビデは自分の犯した罪のゆえに、残りの生涯にはいつも罪の結果がつきまわっていました。それだけ彼の犯した罪は深刻なものだったのです。しかし、ダビデが心から悔い改めた時も、その前に神様ご自身が彼を懲らしめていた時も、神様はいつも彼に愛を注いでいました。神様はそんな心から悔い改めたダビデに対して赦しを与えて、変わらずに守りや祝福を与えられていました。神様はひどい罪を犯した彼さえも

決して見捨てることはありませんでした。私たちも同じです。残念ながら私たちも罪を犯して、神様を悲しませてしまうことはあります。しかし、私たちが心から罪を悔い改めるのであれば、私たちは罪の赦しを得て、再び神様との交わりを楽しむことができると言うのです。

私たちが覚えておかないといけないことは、10節のことばをよく考えてみることです。「**悪者には心の痛みが多い。しかし、【主】に信頼する者には、恵みが、その人を取り囲む**」と。罪を告白しないで悔い改めない、そんな悪者の歩みには痛みが多く、反対に主に信頼する者には恵みが取り囲む。私たちは主に対して罪を告白するのかどうかをよく考えてみなければいけません。

### c) **どんな時も主にあって喜び続けること 11節**

そして最後に、三つ目の適応として挙げられることは、どんな時も主にあって喜び続けることです。11節に「**正しい者たち。【主】にあって、喜び、楽しめ。すべて心の直ぐな人たちよ。喜びの声をあげよ**」と記されていました。これまでも学んできたように、私たちが罪を犯した時には選択肢があります。罪の影響や結果を恐れてかたくなになって罪を隠そうとするか、それとも神様の赦しに目を留めて、自分の犯した罪を認めて告白し、心から悔い改めるかどうかです。ダビデが今日の私たちに教えてくれたことは、罪を悔い改めるのであれば、私たちは神様のうちに赦しを見出すことができるということです。そしてこの赦しのうちに、私たちは最高の喜びを、最高の満足、最高の慰めを見出すことができるのです。ほかのみことばも神様にある赦しに対してこう述べていました。例えば、箴言28:13では「**自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。**」と述べていました。またIヨハネ1:9でも「**もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。**」とありました。だからこそ、私たちに問われていることは、自分自身の罪をできる限り早く認めて、主の前に告白するということです。

### ○まとめ

もしまだこの中に、主イエス・キリストにある罪の赦しをご存じない方がおられるのであれば、きょうそのことを知って帰ってください。いろいろなものを、幸いを、喜びをこの中に見出そうとしているかもしれません。でもみことばが私たちに教えてくれることは、この神様のうちにのみ最高の喜びがあるということです。そして何よりも、もしその神様に対して逆らい続けるのであれば、その者には必ずさばきがあって、必ず聖い神様がそれらすべてのことを正しくさばかれ、そして必ず永遠の地獄でさばきを受けるといことが、みことばにははっきりと約束されているのです。そのさばきから、その罰から救いを与えることができるのは、ただイエス・キリストだけです。ですから、そのイエス・キリストを自分の主として、救い主として、心から信じて罪を悔い改めてこの方に従っていくことを心からお勧めします。

そして兄弟姉妹の皆さん、私たちに問われていることはダビデが教えてくれたことでした。主の赦しにある本当の喜びを覚えて、心に留めて、罪を隠すのではなくて罪を告白する者としてともに成長していきましょう。